



Member's Open Space



いつでも漢詩はおもしろい

●美歯歯科医師会会員

雨田 実

漢詩の歴史は古く、世界最高の詩歌というにふさわしいとさえいわれているけれども、とっつきにくいところもあるし、その面白味、深い味わいなどとなると、私なぞはそのうわつらだけをなでている程度のようなものです。30年位前に、小樽の岩田沖三郎先生（元道歯副会長）が毎月道歯会通信に漢詩を投稿されていて、初めのころは、読みを入れてくれていたのに、いつしか白文のままになってしまって、旧制中学で5年間結構（教頭が国語、漢文の主任教師のため）しぼられた心算であったのに、殆ど歯が立たないので、何度か岩田先生に教えをいただいた覚えはあったけれど、不肖の弟子のままで今日をむかえている。漢詩は中国では一生に一度自分が満足するようなものができれば最高であるとしているそうです。

本家の中国でその有様では、我々の手に負えないのは当然であると思うけれど、文化ゼミで映像で綴る漢詩をよむ、なぞは何ともいえない不思議な三昧境にみちびいてもらえるから有り難い。この原稿が活字になるころに一番相応しいと思う漢詩を説明させていただく。

しゆん ぎょう 春 暁	もう こうねん 孟 浩然
しゆんみんあかつきをおぼえず 春 眠 不 覚 暁	しよしよていちちようをきく 處 處 聞 啼 鳥
やらいふううのこえ 夜 來 風 雨 声	はなおちることたしやうなるをしる 花 落 知 多 少

孟 浩然 (689~740) 湖北省の人、官吏試験に失敗して官職を得ず、野にかくれ住んだといわれるが、李白、王維などとも交際があった人物。

題 枕草子の春はあけぼのの書きだしは多分にこの春暁を意識したのではと思われる。

春暁を覚えず。この絶句ぐらい春の朝をうまく表現した句は少なく、しばしば人口に膾炙した句の一つといえる。のんきそうに見える作者は、生涯不遇であったので、時間づとめの必要がないことも、暁を覚えずに春暁を満喫することが出来たのかも知れないと見ては申しわけないであろう。土岐善麿氏の訳詩を紹介する。

春あけぼのの、うすねむり、まくらにかよう鳥の声、風まじりなる、夜べの雨、花ちりけんか、庭もせに。

井伏鱒二氏の訳もあるので紹介する。

春のネザメのウツツで聞ケバ、鳥の鳴くねで眼がサメマシタ。夜の嵐の雨マジリ、散った木の花イカ程バカリ。

唐代の末のころ長安の出身で、宣宗の大中年間に進士の資格を得た詩人に、干武陵という人が、資格は得たものの、官僚社会になじめず各地を放浪した、といわれるのでくわしい伝記はわからないが、友人との別れの宴で作ったと思われる、さけをすすむ 勸 酒と題する五言絶句がある。この詩人は、まさに一生に一首の人である。とされ他に詩は残されていない。

きみにすすむきんくつし 勸 君 金 屈 卮	まんしゃくじするをもちいず 満 酌 不 須 辭
はなひらけはふううおとし 花 発 多 風 雨	じんせいべつりたる 人 生 足 別 離

金屈卮は把手のついた黄金の盃、満酌は、なみなみとつぐこと、人生別離足るは人生は別れのほ

うが多いということ。私がこの詩を知ったのは40年以上も前、井伏鱒二氏の訳を通じてであった。原詩よりこの訳が名高い。

此の盃を受ケテクレ、どうぞナミナミとツガセテおくれ、花に嵐のタトへもあるぞ、サヨナラだけが人生だ。当時、私はこの訳が気に入って、毎晩のように独身時代の気やすさから、友だちと飲んで、花に嵐のタトへもあるぞ、サヨナラだけが人生だと呑気だったが、以来50年功なきを恥じることも幾度かはあったが、人生のたそがれを覚える昨今、身につまされる詩を見つけたので、はずかしながら紹介したい。

かがみにてらしてはくはつをみる 照鏡見白髪	ちょうきゅうれい 張九齡
しやくせきせいうんのころぞし 宿昔青雲志	さだはくはつのとし 陸耽白髮年
たれかしるめいさようのうら 誰知明鏡裏	けいはいおのずからあいあわれんとは 形影自相憐

張九齡 唐の玄宗皇帝の宰相に昇進し詩人としても名を残した人である。若い時に青雲の志を持

って勉めたのにこと志と異なって白髪の年になってしまった。鏡は何よりも正直に物語り、鏡にうつる影と形、向き合いつつ、互になぐさめ合おうとは。題 鏡を見たらば、頭が真っ白になっていたの、感を起こして賦す。この時に作者は、玄宗皇帝から宰相の位をとかれた時の作といわれている。井伏鱒二氏の訳詩も紹介する。

鏡の自分の顔におどろく

出世しようと思っていたに、どうかする間に年ばかりとる。一人鏡に、うち寄り見れば、シワの寄ったを、アワレムばかり。

終戦後、連合国最高司令官のマッカーサー元帥が、朝鮮戦争でトルーマン米大統領と意見が対立してGHQ司令官を解任された時に日本を退くにあたって、“老兵は死なず、ただきえさるのみ”の言葉を残したが、いち脈あい通じるものを覚えるのは、私のみであろうか？

短歌

古き良き時代の旅順、大連のもの

元美歯科医師会副会長 石原 利男

戦争前の昭和8年から15年頃の、青春の夢多き頃の、旅順、大連開業時代のもの、最近友人から送り返してきた石原先生の短歌。

何時来るも旅順の市街は閑なり

海軍の港 学校の街

僅か乍ら中国語覚えき

何となく満人の店舗に一人行きたり

満人の店員日本語たしかにて

吾れの中国語を微笑みて聴く

爾靈山くぼみを掘れば弾丸出でし

三十年前に射ちしこの弾丸

一本のなつめは有れど

水師堂弾丸の痕なし葉は繁りをり

皇國のため事挙げもせず死にゆきし

兵士の数よ ああ旅順城